

鉄斎 — 中国憧憬 —

2011年4月5日(火)～6月12日(日)

前期 4月5日(火)～5月8日(日)

後期 5月11日(水)～6月12日(日)

10時～16時 月曜日休館 但し5月10日(火)は展示替のため休館



75 西湖全景図



12 蘭亭曲水図

江戸の文人たちは中国文人に憧れを抱き、詩書画印・煎茶を愛好する中国趣味を有してきた。近代日本においてその精神を受け継いだのが、最後の文人と謳われる富岡鉄斎（1836～1924）である。

明代末の董其昌がいう「万卷の書を読み万里の路を行く」との文人の理想を、鉄斎は生涯座右の銘とし実践したが、ついに中国に遊ぶことはなかった。ペリー来航後、日本は開国し、鉄斎の周辺にも中国に渡り新たな文化を学んでくる者が現れる。早くは蔵書家として名高い漢学者の伊藤介夫、明治30年代に入ってから明清画の蒐集で知られる篆刻家の桑名鉄城が鉄斎に新風をもたらした。強い憧憬の念を抱きながらも、鉄斎が中国行きを実現しなかった理由は定かでないが、一説には耳が遠いうえに、語学ができなかったためといわれている。

かわりに中国の古典・文物などを熱心に研究し、自己の見識を高めた。若く生活が苦しかった頃は、高価な書籍を購入することは叶わず、佐々木竹苞楼などの書肆に出入りして本を読み漁った。大成してからはあらゆる分野の書籍を涉猟し、入手困難な漢籍は、度々中国に買付けに出かける書肆鹿田松雲堂や文求堂などに依頼して、その蒐集に努めた。画技においては歴代の画論を網羅し、古画や版画類をテキストとして、先人の法と画に真摯に学んだ。該博な知識と研鑽を重ねた技法は、筆墨表現のなかで結実する。おそらく鉄斎ほど中国の故事・逸話を題材にして多様な作品を遺した画家は、日本は勿論のこと中国にもいないだろう。

鉄斎と謙蔵 明治30年代半ば、70歳前後の頃より、鉄斎は中国文化への興味の範疇を広げ、その理解と表現を格段に飛躍させる。それは息富岡謙蔵（号桃華、1873～1918）の学問と見識が充実期を迎えた頃と時を同じくした。謙蔵は明治36年から京都帝国大学附属図書館の和漢書の蒐集に大きな功績を遺し、同41年に京都帝国大学文科大学講師を嘱託されてからは、支那金石学と宋代史の講義を受け持っていた。明治43年には、内藤湖南らとともに敦煌出土の経巻を調査するために北京に出張し、翌44年に蘇州、杭州、45年には満州の奉天（瀋陽）、大正6年には華中に赴いた。その度に謙蔵は鉄斎の好む書画文物を持ち帰り、喜ばせたという。

室町一条にある富岡家は、謙蔵の学友たちが集うサロンの一つとなっていて、長尾雨山、内藤湖南、狩野君山、小川如舟（琢治）、山本竟山らが出入りし、時には鉄斎も同席して清談をかわした。大正期、同家の玄関には「不読五千巻書者無得入此室（五千巻の書を読まざる者は、この室に入るを得ず）」なる扁額（No.79）が掛け

られており、世間の評判をよんでいた。出典は中国の晋から隋の学者崔儵の語で、これを清末の趙之謙が書したものを同家は蔵していたが、残念ながら日本家屋にはそぐわず、親交のあった書家の山本竟山に縮写したものを嘱して、玄関に掲げていたのである。いかなる碩学をもってしても、この辛辣な文言に適う者はなく、まだ学徒であった神田喜一郎もはじめ戸惑いを覚えたことを回顧している。しかしこれは他者を圧する意味ではなく、学問で一家をなす富岡家の誇りであったのだろう。

鉄斎が生涯のうち最も親しく交わった中国人は、考証学の大家羅振玉であった。辛亥革命の難を避けて日本に亡命していた羅振玉とは、謙蔵の縁で交流し、洛東田中村の寓居を鉄斎が訪ねたり、羅振玉もしばしば鉄斎宅を訪ねて珍しい古書を借りにきていたという。大正8年、帰国の折に京都円山の左阿弥で開かれた送別会には鉄斎も出席して別れを惜しみ、その交流は帰国後も続いた。《漁邨暮雨図》(No.54)は、帰国した羅振玉から「願書万本誦万遍（願わくば万本を書し、万遍誦せん）」印を贈られたことを喜んで、試みに牧谿の法に仿って描いた図である。

中国文化への深い理解から創出される鉄斎の絵画世界は、こうした謙蔵の学問と広い交友関係が力強い支柱となっていて、晩年新たな境地へ到ったのである。



富岡謙蔵

内藤湖南

江道出翁曹
謙蔵の
人枚圖下志

明治45年 満州にて
(向かって左から富岡謙蔵、曹廷杰、内藤湖南)

大正癸丑蘭亭会 永和9年(353)に王羲之と文雅の友41名が会稽山陰の蘭亭(浙江省紹興)に会し、曲水を流して詩を賦した蘭亭曲水の宴は、のちの同じ癸丑の年に、その故事を継ぐ追悼雅会がたびたび行われてきた。

26回目の癸丑にあたる大正2年(1913)の4月12・13日、内藤湖南、上野有竹(理一)が首唱して記念の蘭亭会を開き、鉄斎・謙蔵親子も主唱者のなかに名を連ねた。13日に南禅寺天授庵において行われた脩祭では辞章が奠じられ、参加者は文雅のひとつきを満喫した。このとき設けられた王羲之の神位に、中国から長尾雨山が送ってきた蘭亭の清流の水を供える趣向は人々を驚かせたという。また岡崎の京都府立図書館においては、両日にわたって「右軍書蹟展覧会」が催された。王羲之の最高傑作の一つに挙げられる「孔侍中帖」など数々の名品が展覧され、稀覯本の蔵書家で知られる謙蔵も19点の関係資料を出品したことが、「蘭亭会展覧目録」には録されている。こうした悠久の歴史を有した逸品とともに、鉄斎筆の「右軍換鶖図」と《蘭亭図考卷》(No.39)が会場を彩った。なお、上野有竹が鉄斎に依頼した《蘭亭脩禊図》(参考)の大幅が賛助出品されたことは、湖南の箱書より知られるところである。

蘭亭曲水は、書聖王羲之に取材した山陰換鶖、王羲之書扇の故事とともに、中国文化への憧れをもつ日本の文人に好まれた画題である。鉄斎も若い時より好画題としてきたが(No.12)、先人たちがこの故事をいかに表現したかにも興味を注いだ。自ら摸写纂集した《蘭亭図考卷》は、蘭亭研究の成果の一つとして注目される作品である。ところで鉄斎は、画題にゆかりの材を用いる作画法を好んだが、《蘭亭真景図》(No.33)には「蘭亭真景用山陰縣蘭渚之水写之。大正癸丑三月三日」とあり、おそらく雨山が送ってきた蘭亭の水を用いて真景図を描くことを試みたのであろう。



参考 蘭亭脩禊図
 (『鉄斎研究』第13号より転載)

寿蘇会・赤壁会と「百東坡展」 宋代第一の詩人蘇東坡(蘇軾)は、景祐3年12月19日に生まれた。その生日を祝う寿蘇会は、大正3年の12月に中国から帰国し京都室町通りに居を構えた長尾雨山の呼びかけに富岡謙蔵が応じて、二人の共催で開かれる運びとなった。第1回の乙卯寿蘇会は、大正5年(1916)の坡公生日(陰曆12月19日)に円山の春雲楼(左阿弥)において催された。参加者は鉄斎を筆頭に、羅振玉、王国維、羅福萇、湖南、君山、竟山等で、東坡に因んだ書画や文物を陳列してその高風をしのび、携え来た詩文を披露し、あるいは即席感懐を賦して一日の清興を尽くした会であったことは、雅会を記録した『寿蘇録』や書画帖《寿蘇集》(No.40)が伝えるところである。恒例の雅会として軌道に乗り始めた大正7年の12月、主催者の一人である謙蔵が逝去する。謙蔵を友として極めて敬愛していた雨山は、哀悼を表すため翌年の会を中止するが、大正9年には再開し、翌10年の庚申寿蘇会までの間に5回を数える会が催された。

東坡と同じ日に生まれたことを誇りとしていた鉄斎は、とりわけこの会を楽しみにして《蘇子笠履図》(No.41)など、中国版画に拠った東坡に関する力作を毎年出品した。しかしこの間に、愛息を喪う不幸にみまわれ、鉄斎にとっては様々な想いがのこる雅会となった。

さて、大正11年9月7日(陰曆7月16日)は、東坡が元豊5年(1082)壬戌7月既望に赤壁に遊び「前赤壁賦」を詠じてから14回目の壬戌7月既望にあたる。それを記念して東坡の赤壁遊に関する書画を展示し、宇治川を赤壁に見立てて舟遊びを再現する赤壁の雅会が雨山を中心に計画され、鉄斎も発起人の一人として名を連ねた。「芸苑に向かつて刺激を与え、千古偉大な東坡先生を偲ぶ」という雨山の高い志にこたえて、鉄斎は《前赤壁図》(No.63)《赤壁四面図》(No.62)《東坡故事図》や絵付けを施した煎茶具(No.78)などを賛助出品した。

本部を菊屋（万碧楼）、煎茶席を興聖寺畔東禅精舎に設えた赤壁会は、規模が大きくなりすぎたうえに天候にも恵まれず、一部の非難を受ける結果になった。あまりの混雑ぶりに、鉄斎は家族を従えて他所に避難したようだが、壬戌の一日を楽しんだことは、雅会のものちに描かれた《後赤壁図》(No.64)や《擬赤壁遊図》(布施美術館蔵)が物語るところである。

鉄斎は若い頃より東坡の文学・故事・肖像・筆法などに学んできたが、大正5年から11年にかけて催された東坡にまつわる雅会は、晩年自ら「東坡癖」と称するほど、その尊崇に拍車をかける要因となった。同11年11月には大阪高島屋美術部にて「百東坡展」が開催され、図録『百東坡図』が発行される。収録された多彩な作品からは、鉄斎の長年に亘る東坡研究の成果を見ることができる。

「西湖図に関する書画展覧会」 中国浙江省にある西湖は、杭州の役人として赴任してきた白樂天が築いた白堤、蘇東坡が造営した蘇堤などの名所を擁する湖で、観光地として名高い。季節・天候・時刻によってさまざまに変化する景色は西湖十景と定められ、湖南省にある洞庭湖の瀟湘八景とともに中国のみならず、日本においても文学や絵画の分野で享受されてきた。

文人の憧れの地である西湖を、鉄斎も好んで題材とし、清人筆の図に倣って西湖十八景を描いた《勝蹟図集》(No.20)、西湖畔に隠棲して梅と鶴を愛した宋代の詩人林和靖に取材した《梅溪清隱図》(No.31)などを描いている。

大正6年、謙蔵は華中に出張した折に武林に遊び、西湖の梅や水仙を土産に持ち帰ってくる。この頃に描かれたと思われる《西湖遠眺図》(No.43)には、扇子の裏面に長尾雨山書の「西湖十首之内二」があり、鉄斎周辺の文雅の場を伝える作として興味深い。

さて大正13年11月、大阪高島屋美術部で日中の書画家49名が西湖にまつわる作品を寄せた主題展「西湖に関する書画展覧会」が催され、同年12月にはその図録『西湖画集』が出版された。この画集には、鉄斎の手になる題字と題句「晴好雨奇。摘東坡句。鉄斎九十老人」があり、続いて長尾雨山の序文、目次のあとに橋本閑雪、富田溪仙、王一亭、呉昌碩等の書画計84件が収録されている。そのうち鉄斎筆《西湖全景図》(No.75)は、蘇東坡の「飲湖上初晴後雨詩」に拠る「雨奇晴好(雨にも奇して晴れにも好し)」の題字があり、蘇東坡が杭州の副知事を務めた時に目にしたであろう晴れても雨でも美しい西湖の全景がひろがる図である。

鉄斎は生涯中国の地を踏むことはなかったが、画題となる場所の地図や地誌などの資料を必ず手に入れ、また土地に行った者の話を聞き、それらを自身の頭の中で再構築してから描いていた。蘭亭、赤壁、西湖のいずれの地も隅々までを検証し、いつでも心に思い描くことができたのである。こうした中国故事を追悼する雅会、名所に関する書画会への参加は、晩年の名作を創出する場となった。

本展は、鉄斎の中国に対する深い憧憬と見識を作品からたどるものである。併せて典拠となった漢籍・版画、また鉄斎の中国理解の最大の助言者である富岡謙蔵の関連資料や雅会の資料、交流のあった羅振玉から贈られた文物なども紹介し、明治中期から大正期にかけて鉄斎が享受した中国文化の一端をご覧いただきたいと考えている。(柏木知子)

【参考文献】

長尾正和「長尾雨山(八～十)」(『冊府』第17～19号 彙文堂 1962～64)／同「京都の寿蘇会」(『書論』第5号、書論研究会 1974)／同「寿蘇会と赤壁会(上)(下)」(『墨美』第253・254号 墨美社 1975)／神田喜一郎『敦煌学五十年』(二支社 1960)／同「鉄斎逸事」(『図書』吉川弘文館 1968)／須羽源一「大正癸丑の京都蘭亭会について」(『書論』第3号 書論研究会 1973)／日比野丈夫「鉄斎と京都学派」(『別冊墨』第10号「富岡鉄斎」 芸術新聞社 1989)／松村茂樹『呉昌碩研究』(研文出版 2009)



43 西湖遠眺図

《出品目録》

[書・画]

番号	名 称	作 年		年齢	寸 法	材質・彩色	員数
1	層巒雨霽図	慶応3	1867	32	125.6×39.5	紙本墨画	1幅
2	擬明人筆着色山水図	慶応4	1868	33	129.3×42.5	絹本着色	1幅
3	花卉図	明治2	1869	34	125.4×41.9	紙本墨画	1幅
4	墨竹図・同詩書	明治2	1869	34	各134.0×59.0	紙本墨画・墨書	2幅
5	淵明隱栖図			30代	139.1×50.6	紙本淡彩	1幅
6	魁星図			30代	36.2×52.3	絹本淡彩	1幅
7	蔬菓図			30代	138.2×48.1	絹本着色	1幅
8	蘇公泛舟図			30代	116.9×34.0	絹本着色	1幅
9	陽羨清韻画冊			30代	各21.0×28.6	紙本淡彩	1帖
10	漁樵問答図	明治10	1877	42	146.4×65.4	紙本淡彩	1幅
11	陶淵明像	明治13	1880	45	132.1×50.7	紙本淡彩	1幅
12	蘭亭曲水図	明治17	1884	49	135.4×50.4	絹本着色	1幅
13	老子出関図・淵明遊興図			40代	各137.8×63.9	紙本淡彩	2幅
14	武陵桃源図	明治24	1891	56	126.2×50.0	絹本着色	1幅
15	幽風詩意図	明治26	1893	58	各135.6×49.2	絹本着色	4幅
16	李太白像	明治26	1893	58	126.0×51.1	紙本淡彩	1幅
17	湘君図	明治27	1894	59	141.4×48.7	紙本着色	1幅
18	伯夷叔齊像			50代	128.1×52.0	紙本淡彩	1幅
19	習字帖			50代	29.0×76.0	紙本墨書	1帖
20	勝蹟図集			50代	各16.1×22.6	紙本着色	1帖
21	天保九如章図	明治29	1896	61	140.3×56.0	絹本着色	1幅
22	景德鎮陶窯図巻	明治29	1896	61	16.9×637.0ほか	紙本着色	2巻のうち
23	牧溪嗜酒図	明治30	1897	62	132.0×32.8	紙本着色	1幅
24	憚南田墨帖	明治30	1897	62	各24.9×30.0	紙本着色・墨書	2帖
25	玻璃版龍城石刻拓並柳宗元像	明治32	1899	64	拓26.8×49.0 画29.7×47.8	紙本玻璃版 紙本淡彩	1幅
26	閻家全慶図	明治33	1900	65	103.5×48.7	絹本着色	1幅
27	七巧図合璧	明治37	1904	69	各19.9×23.0	紙本墨書・着色	1帖
28	勾白字詩七絶			60代	112.0×51.2	絹本着色	1幅
29	前後赤壁遊図			60代	各129.8×52.0	絹本着色	2幅
30	壺天図	明治39	1906	71	122.8×46.4	紙本淡彩	1幅
31	梅溪清隱図	明治43	1910	75	139.3×39.9	絹本着色	1幅
32	莊子八千椿図	明治45	1912	77	142.0×42.0	絹本着色	1幅
33	蘭亭真景図	大正2	1913	78	16.4×50.0	紙本墨画	1本(扇子)
34	虎溪三笑図	大正3	1914	79	137.7×34.4	紙本墨画	1幅
35	摸石澇山水画冊	大正3	1914	79	各36.2×40.5	紙本淡彩	1帖
36	秋声賦意図			70代	141.5×69.7	紙本淡彩	1幅
37	豎石點頭図			70代	132.5×33.5	紙本着色	1幅
38	麻姑女僊図			70代	126.6×49.0	絹本着色	1幅
39	蘭亭図考巻			70代	21.0×44.25	紙本墨画	1巻
40	寿蘇集	大正5-7	1916-18		各24.5×37.0	紙本墨画・墨書	2帖
41	蘇子笠屐図	大正6	1917	82	146.4×61.0	紙本淡彩	1幅
42	王元之竹樓記図	大正6	1917	82	169.6×70.8	絹本着色	1幅
43	西湖遠眺図	大正6	1917	82	15.0×42.2	紙本墨画	1本(扇子)
44	東坡談図	大正7	1918	83	各26.2×37.4	紙本着色	1帖
45	蘇東坡像	大正7	1918	83	100.5×32.0	紙本淡彩	1幅
46	草聖図	大正7	1918	83	134.5×32.5	紙本墨画	1幅
47	呂僊翁自写像	大正7	1918	83	145.0×51.8	絹本着色	1幅
48	盧仝喫茶図	大正8	1919	84	42.0×50.2	絹本着色	1面
49	孔明躬耕図	大正8	1919	84	131.4×47.9	紙本淡彩	1幅
50	四君子図	大正8	1919	84	155.8×194.0	桐板着色	4曲1隻
51	乘桴浮海図	大正8	1919	84	165.4×50.0	絹本着色	1幅
52	朝川雪景図	大正8	1919	84	133.6×64.4	紙本淡彩	1幅
53	読書立志図	大正9	1920	85	132.0×34.5	紙本淡彩	1幅
54	漁邨暮雨図	大正9	1920	85	131.0×32.3	紙本墨画	1幅
55	陳希夷僊窩図	大正9	1920	85	131.0×32.5	紙本着色	1幅
56	寒山拾得図	大正9	1920	85	143.8×49.8	紙本淡彩	1幅

57	雲鬮石門図	大正 10	1921	86	131.7× 54.3	紙本墨画	1 幅
58	僊游蓬萊図	大正 10	1921	86	50.8× 63.8	紙本着色	1 幅
59	帝者師太公望釣魚図	大正 10	1921	86	141.5× 38.6	紙本淡彩	1 幅
60	孫真人山居図	大正 10	1921	86	145.9× 40.4	紙本着色	1 幅
61	伏魔大帝関雲長像	大正 10	1921	86	132.8× 51.5	紙本着色	1 幅
62	赤壁四面図	大正 11	1922	87	155.6× 42.7	紙本淡彩	1 幅
63	前赤壁図	大正 11	1922	87	155.2× 43.0	紙本淡彩	1 幅
64	後赤壁図	大正 11	1922	87	146.6× 40.4	紙本淡彩	1 幅
65	西湖孤山図	大正 11	1922	87	10.2× 33.0	紙本墨画	1 本 (扇子)
66	嫦娥奔月図	大正 12	1923	88	132.6× 53.6	紙本淡彩	1 幅
67	西王母像	大正 12	1923	88	131.0× 47.0	紙本着色	1 幅
68	東坡居士江山詩意図	大正 12	1923	88	53.4× 64.0	紙本墨画	1 幅
69	金粟如来維摩詰像	大正 12	1923	88	96.3× 43.0	紙本淡彩	1 幅
70	東坡笠履図	大正 12	1923	88	16.3× 52.2	紙本着色	1 面 (扇面)
71	朱梅図	大正 12	1923	88	150.4× 40.1	紙本淡彩	1 幅
72	梅華書屋図	大正 13	1924	89	109.4× 39.0	紙本淡彩	1 幅
73	蘇斜川図	大正 13	1924	89	134.5× 33.5	紙本淡彩	1 幅
74	陸羽茶寮図	大正 13	1924	89	133.9× 33.5	紙本淡彩	1 幅
75	西湖全景図	大正 13	1924	89	141.2× 39.0	紙本淡彩	1 幅
76	瀛洲僊境図	大正 13	1924	89	142.6× 40.2	紙本着色	1 幅
77	前赤壁賦書	大正 13	1924	89	各 32.7×264.4	紙本墨書	3 帖

[器玩]

番号	名 称	作 者	制 作 年		年齢	寸 法	員数
78	赤壁会所用煎茶具	水指 鉄斎絵・六代高橋道八作 菓子鉢 鉄斎絵・六代高橋道八作 茶心壺 鉄斎絵・内藤湖南書	大正 11	1922	87	16.0×19.5×11.4 9.0×16.7×16.7 11.5×5.2×5.2	1 式

[周辺資料]

番号	名 称	作者・制作者	制 作 年		寸 法	員数
79	不読五千巻書者無得入此室書	山本竟山	大正 3 年頃	1914 頃	29.8×128.5	1 面
80	安蘇居書	羅振玉	大正 8 年頃	1919 頃	37.0× 75.0	1 面
81	曼陀羅窟書	呉昌碩	中華民國 12 年	1923	36.0×108.2	1 面
82	白衣観音図拓本	呉達	中国・清時代		145.0× 52.7	1 幅
83	東坡笠履図拓本	陳善武	中国・清時代		126.0× 62.8	1 幅
84	益智図	榮録堂製	中国・清時代			1 組

・ 出品作品は期間中下記の通り 2 回に分けて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

前期 4 月 5 日(火)～5 月 8 日(日) 後期 5 月 11 日(火)～6 月 12 日(日)

・ 下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。

4 月 16 日・30 日、5 月 21 日、6 月 4 日 午後 1 時 30 分より

・ 次回展覧会 「鉄斎の粉本」 (仮称)

前期 6 月 21 日(火)～7 月 24 日(日) 後期 9 月 1 日(木)～9 月 25 日(日)

※夏期休館 7 月 25 日(月)～8 月 31 日(水)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>